

オセアニアの新語法

ニユースピーク

— オールウェルの「一九八四年」から —

中西 靖 忠

はじめに

小説「一九八四年」はジョージ・オールウェルが一九四八年に書きあげて、その年四八年を逆にして「一九八四年」と題名にしたものだ。出版された日から問題小説であった。その一九八四年が現実をやってくる前年からの昭和五十九年は、この小説やオールウェルの関する論考、言及が各分野からなされて、百家争鳴の感があった。

人民大衆を全面的に管理操作し権力を保持しようとする恐ろしさを、オールウェルは党独裁の全体主義の体制の国に見て警告した、と思える。三十五年経って幸いなことにオールウェルの想定どおりになっていない。喜ばしいことであるが、気がかりなことは多い。それは全体主義の体制をとっていない民主主義国であっても、高度に科学技術が進んで社会は複雑に組織化され、システム化され、コンピュータを駆使し得る官僚層が新しい権力者としての地歩を築くのではなからうか、が一つ。

オールウェルがあげる管理体制の独裁権力が原則とする「歴史の改竄」は現代史に於てもわが文部省が固執しているように見えるが日本民族の悪き体質ではないのか。黒を白と白を黒と見せる為政者の「二重思考」の見事さ。イングソックに学んだわけではあるまいが、ロッキード事件、防衛関連の「多卒」、非核三原則等の発言に顕著である。タテ前と本音を使いわけける技術は優等生である。そして「ニユースピーク（新語法）」官庁を先頭に企業も評論家も外来語のカタカナ表現を好む。会社名にも集会名にもカタカナ名、ローマ字が氾濫して国籍を問わない。ニユースピークの略語志向はこの国で流行している。国語を効率的、実利的にのみ見て、尊敬する気持ちを忘れていたのではなからうか。

ことばの新語法への変革について、サイムの「言語が完全なものになったときこそ革命の完成だ。新語法はイングソックそのものであり、イングソックは新語法そのものなのだ」の発言に会って、私は旧制中学程度の英語を数十年前に学んだだけということを忘れた。従って原文を参照することもなく、英語の神髄を知得してもいない。自身で妙な感じでいることを白状しておくが、「他山の石」としたい気持ちから筆を執ったものである。専ら使用したテキストは、ハヤカワ文庫AN V 8 √新庄哲夫訳の「一九八四年」（昭和58・7、十三刷）である。

作者の人と経歴

ジョージ・オーウェル（一九〇三—一九五〇）は本名をエリック・アーサー・ブレアといい、インドベンガル州で麻薬管理官を父として生まれた。上層中産階級の子弟として奨学金によるエリートコースのイートン校へ進んだが、学校になじめなかった。父親の強い願望もあって、オックスフォード大学への進学をあきらめ、インド帝国警察に就職、五年間をビルマで勤務した。植民地の苛酷な圧政の中にいて権力を行使する側に立つ立場はオーウェルにとって耐えがたい日々のものであった。

二十四歳、一九二七年に賜暇で帰国するのを機に退職し作家を志し放浪する。三〇年代の大恐慌でのどん底生活の中で「パリ・ロンドンどん底生活」（33年）「ウィガン波止場への道」（36年）など極限に達した貧困状況をルポルターージュした。

この間欧州ではヒットラーのナチズム、ムッソリーニのファシズムの台頭があり、スペインでは一九三六年人民戦線派が選挙に勝利し共和政権を樹立したものの、七月フランコが反乱を起し、スペインの内乱が始まる。ジャーナリストとしてスペインに渡ったオーウェルは人間的な自由平等の理想主義的社會主義の確立の念願に燃えて、マルク

ス主義統一労働党・P O U M市民軍に投じ、義勇軍の一兵士となる。

戦線で咽喉部に貫通銃創の重傷まで受ける。ところがソ連の介入によって力を得たスターリン主義者たちの共産党が主導権を握り、革命の同志であるべき労働組合主体のP O U Mを非合法化し、トロッキスト集団として過酷な弾圧を加え抹殺しようと謀った。オーウェルは間一髪スペインからの脱出に成功し、九死に一生を得た。

オーウェルはスペインで共産党の革命同志への裏切りを見たばかりではない。帰国した英国の共産党系の新聞雑誌は、彼が生命をかけたスペインの真実を歪める偽造と虚偽の報道にあふれていたし、真実を見て見ないふりをして抹殺し通した。オーウェルには許しがたい事であった。三八年出版した「カタロニア讃歌」で政治的に無知だったことを白状するとともに執拗なまでにその不誠実を追及している。

こうした体験がなければオーウェルの政治的な作品、寓話形式の「動物農場」（44・2）そしてデストピア小説「一九八四年」は生まれなかつたらう。「政治的文章を芸術に高める」ことと、「暴露しなければならぬ虚構が存在し、ぼくが注意を喚起したいような事実が存在するから」書くという。

「動物農場」は自由と平等をめざして人間を追放した動物たち、その革命を指導した豚族が権力の座につくと、以前にもまして権力者になり搾取者になってゆく過程を単純明快に図式化している。そのナポ

レオンをスターリンに、追放されるスノーボールをトロッキーに、ボクサーをトハチエフスキー、犬の一群を国家警察、風車建設は工業化政策という風に発表当初から実在の人物事件にあてはめて受取られた。権力の獲得からその腐敗までの進展はなにも左翼共産革命に限られたものではなく、ナチズム、ファシズムの右翼全体主義も同じく、国家権力のもつ必然の体質である。この左右の全体主義的独裁体制は一方が一方によって打倒されたとしても、やってくるのはさらに高度で強力な精緻を極めた管理体制であろうと予見したと察せられる。「一九八四年」の構想を得たという一九四三年はソ連がスターリングラードを包囲したナチス軍を破って攻勢に転じた年であった。

オーウェルは一九四六年夏から四八年秋にかけてこの小説を執筆する。「ヨーロッパ最後の人間」の題も考えられたこの作品は、肺結核の進行で入退院を繰り返す療病のうちに書き進められ、原稿をタイプする助手も得られないまま、死期を早めるような執念によって四八年十二月四日に完成する。一九四九年六月八日に英国、米国では六月十三日に出版され、英国で十月末までに二万二千七百部が、さらに五年四月までに約五万部、アメリカでは三十六万部以上が売れる大きな反響を呼び、結局は六十二国語に翻訳された。しかしオーウェルは出版の半年後の一九五〇年一月二十一日の早朝、大咯血によりロンドン大学の病院で急死する。正にこの作に身命をかけたといつてよい。

オセアニアの社会

オーウェルが三十六年前に想定した一九八四年は次のような世界である。

世界は三つの超大国に分割されて対立、絶え間なく戦争が続いている。いずれも独裁的全体主義国である。オセアニア(北・中・南米と旧大英連邦)、ユーラシア(欧大陸、頂点にソ連があると想像される)、イースタシア(中国、東南アジア、日本も含まれる)であり、過ぐる日の核戦争のあと、この三超大国はいずれか二国が同盟して一国に当る通常兵器で戦争が常時続いており、一国の決定的な勝利は望むべくもないし、各国の支配者も望んではいない。小説の舞台はオセアニアで三番目に人口の多いロンドン(エアストリップ一号の首都)で、主人公ウィンストン・スミスが中心なので、他の地域の様子は分からないことが多いが、ほぼ同じ状況とみてよいだろう。

オセアニアは一九五〇年代末の革命(粛正)で、イングソック(IN G S O C || 英国社会主義の新語名)体制になり、姿なき独裁者、偉大なる兄弟、B・B(Big Brother)の完全無欠、絶対に謬りを犯さない全能の独裁的指導の下で、強固な管理体制をしる全体主義国である。戦時下にあるロンドンには荒涼としており、到る所に「偉大な兄弟があなた

を見守っている」と書いた大きな顔のポスター、INGSOC、三つのスローガン「戦争は平和である／自由は屈従である／無知は力である」が張り出され、誰も彼も思想警察に常時監視されていた。人口の八五％はプロレと称す被支配階級で、六百万人、人口の二％の党員が支配した。部屋にはテレスクリーンの装置があつて党の広報が流され、またこちら側の動作、声の調子、表情から心の情動まで見抜かれる仕組みになつていて、新語法ニュースピーク・フェイスライムで表情罪と呼ばれ刑罰の対象になるのであつた。またどこに盗聴器があるかも知れなかつた。党員には余暇がなく、独りで散歩に出かけることも利己生活オウソライフ（新語法）といつて個人生活と逸脱行為とされた。他の世界の事情は知らされることなく、過去とも切り離されて党のいまのままの現状を肯定し、党が正統としないものを受け入れる余地は全くなかつた。

子ども幼年期からスパイ団に所属する。裏切り者を摘発するスパイ狩を遊びとし捕虜の公開の絞首刑を見るものを楽しむ。組織の力によつて党に關係するものすべてを礼讃するように育てられ、親は昼夜の別なく子どもに監視される恐怖の中にいる。現に主人公の同僚パーソンズは寝言を聞かれて七才の娘に思想犯罪者として密告されている。成長しては「青年同盟」に所属し、出席が注意深く記録されるコミュニケーションセンターの仕事に奔走する。「青年反セックス連盟」もあつて両性の完全な独身主義を唱導していた。性行為に快楽を求めるのは罪と

され、結婚とは党に奉仕するための子どもを生むためであり、人工受精によつて出産し、公共施設で養育されることになつている。

主人公ウィンストン・スマスは内部党員の下に位する外部党員アウトター・パーティーで三十九歳、六〇七九の背番号で呼ばれる。真理省で記録を改竄する仕事をしている。朝七時十五分のテレスクリーンの警笛で起され、新聞、書籍、刊行物、漫画、写真……あらゆる文書や記録の改変作業に従事している。党は絶対に正しいのであるから党の方針のとりの現実にならなければ訂正されねばならない。肅正された者は以前に功労があつたとしても記録は消されなければならない。一分刻みに過去は現在に合致するよう改められ、党活動の目的に矛盾する記録は残されてはならない。歴史を書き直す仕事をしている。

党が強い虚構を受け容れ、あらゆる記録が同じ虚構を述べるなら、それは真実となつてしまう。「過去を支配する者は未来まで支配する」として、この歴史の改竄は、黒を白といいくるめる二重思考ダブルシンク・ニュースピーク、新語法とともにインゴックを支える原則である。二足す二が五であると党の決定こそが真実であり、党員は与えられる状況のみが世界であるとする閉鎖された、管理される社会は、孤独に生きねばならぬ。人間性を抹殺する権力の腐敗、墮落だと疑問に思いウィンストンは耐えられなくなる。そして分れば死刑になるだろうと思われる日記を書くことと思いつく。

「偉大な兄弟を打倒せよ」

とは無意識に繰りかえしベンが走った文である。そして正気であるところこそ人類の遺産を継承することになるのだ、と。

未来あるいは過去へ、思想の自由な時代、また人間が各自の個性を持ちながら、孤独でない時代へ。真実が存在して行為の変造がきかない時代へ。

画一の時代から、孤独の時代から、「偉大な兄弟」の時代から、二重思考の時代から。挨拶を送る！

書き綴りはじめた。

ニュースピーク(新語法)のこと

「一九八四年」は主人公ウインストン・スミスが自宅の勝利マンションズに帰って、監視用の双方向性テレスリールのある七階の部屋に入るころから始まる。そこから一キロ離れた勤務する真理省が望まれる。ハヤカワ文庫本では、

真理省は新語法ではミニトルーと呼ばれるが……

とあり、原注には「ニュースピークはオセアニアの公用語であった。その言語構造と語源の解説は巻末の付録を参照されたい。」とある。

そして本文はつづいて四つの建物をあげ、「それは政府の全機構を分

轄する四官庁の庁舎であった。真理省は報道、娯楽、教育、美術が所

管事項で、平和省は戦争、愛情省は法と秩序の維持を

担当し、豊富省は経済問題に責任があった。新語法でいえば、

ミニトルー、ミニパックス、ミニラブ、ミニプレンティだ」とある。

巻末付録「ニュースピークの諸原理」は文庫本で十八頁にわたっている。ここにあげられているのはB語彙群に属する用語だが、ルビを付

けて次のように続々と登場する。

リアリティ・コントロール
真実管理 二重思考(ダブルシンク)

イングリッシュ・ソシヤリズム
英国社会主義 INGSOC

アーティフィシャル・インセメネーション
人工受精 アートセム

ポルノグラフィ・セクション
春本春画課 ポルノ課

現在用いられている英語(旧語法と呼ぶ)の熟語を簡略にして呼び易く合成した略語群であり、記号化である。

付録の文によれば、

新語法はオセアニアの公用語であり、イングソック即ちイギリス社会主義のイデオロギーの要素に込めるべく考案された言語であった。(傍点筆者)

であり、二〇五〇年を目標にいままで用いられている標準英語(旧語法)に代る最終的言語として計画され、着々と実行されている。『新

語法辞典』九版が行き渡り、決定版になる十一版が編集されつつある。

目的はイングソックの「熱狂的な支持者に固有な世界観や精神的慣習に対して一定の表現手段を与え」「イングソック以外のあらゆる思考方法を不可能にすること。イングソックの諸原則から逸脱する異端の思想は言語活動として存在させないためである。「明白な異端の用語は抹殺され」また語彙の削減もはかられる。「思想の範囲を拡大するためでなく、むしろ縮小するために考案されたものであった。」

この付録について、単なる補注なのか、いや特異な形式であるが小説作品の重要な一部である。オーウェルがもっとも書きたかった主題であると指摘するむきもある。またこの解説が過去形で書かれているのに注目したのは清水徹である。『現代詩手帖』8(84・8、思潮社)で「架空の言語についての学術論文を過去形で書く、これはきわめて異様なことです。」補注でなくて小説の最終章だというのである。そうだとするとオーウェルの描いたイングソック・オセアニアという国の存在を過去のものとする。オーウェルはかかる党独裁専制の全体主義国の存続を認めていなかったといえる。ともあれ高度に管理化された国家体制がさらに人民の管理を徹底し永続させようと企てるとき、最終的には「ことば」の改造に辿りつくという発想は最も先見性にあふれた警告である。

ウィンストン・スミスの友人に調査局に勤務するサイムがいる。言語学者で新語法の専門家である。最終的決定版「新語法辞典」第十一

版の編集に従事し、形容詞を担当している。サイムはこんな風に語る。

「主な仕事は言語の発明にあると考えているだろうが、さにあらずわれわれは言語を破壊しているんだ―何十、何百ともなく、毎日のようにね。国語を土台から造りなおしているんだ。」「美しいことだね。言語の破壊というのは」と。動詞、形容詞、また名詞にも同じ意味、ニュウアンスの異なる類語を整理し合理化する。反対語の場合だって、“good”(良い)という言葉があれば、反対は“ungood”(良くない)でじゅうぶんだ。“bad”みたいな語は不用である。またもし“グッド”の強い意味を持った言葉が欲しければ“plusgood”や“double plusgood”とすればよい。“excellent”(優秀な)とか“splendid”(見事な)といったような曖昧で役に立たない一連の単語を持っていても仕方がないと説くのである。

「結局、良いとか悪いとかの全体的な概念は僅か六つの単語で―実際にはたった一つの単語で表現されることになるだろう。君には分らないかね、そうした美しさは、ウィンストン?」

そして、

「新語法こそ年毎に語彙が減っていく世界唯一の言語だ」「思想の範囲を縮小する」のが目的であり、「イングソックは新語法そのものだ」と宣言する。「党の文学だって変る。スローガンも……自由の観念が廃棄されたら、『自由は屈従である』というスローガンの存在価値はあ

るだろうか。思想の全潮流は一変してしまっただろう。現実にいまわれわれの理解しているような思想は存在しなくなる。正統とは何も考えないこと、考える必要がなくなることだ。正統とは意識を持たないということになるわけさ」

と、新語法の意図目的を胸を張って語らせている。

ニュースピークの用語はA語彙、B語彙(別名を合成語)、C語彙という明確な三群に分類される。

A語彙群 日常生活のビジネスに必要な用語 飲食、労働、衣類の着用、乗車、庭いじり、料理その他の類、標準英語から大半を引継いだ打つ、走る、犬、木、砂糖、家、畑などだが、その数は減らされた意味も厳しく限定され、曖昧性やニュアンスを追放した概念の歯切れのよい音声に過ぎなかった。文学とか政治哲学の論議には適さなくなっていた。

B語彙群 政治的用語として政治的意味を内蔵した意識的に合成した人工語で、この語の使用者は好ましい精神的態度が養成されるよう意図されている。一種の速記用文字といえる略語で、さきに例示された用語のように思想の範囲全体を、一〜二音節の小数の音節内に詰め込むと同時に、普通の用語よりも遥かに正確であり、迫力を持つよう考慮されている。名詞、動詞が主体であるが、イングソックの諸原則について全面的な知識を持たなければ正確な使用は困難とされた。

語句の短縮は二十世紀初期からの政治用語の特徴的性格の一つであったが、B群では人々の口にしやすいよう圧縮され、簡単に発音できる一語にされた。ウィンストン・スミスの勤める真理省を例にとれば

レコーズ・デパートメント
記録局
フィクション・デパートメント
創作局

テレスクリーン番組製作局 Teledep

という具合で、あらゆる組織、団体、教義、国家、公共機関に適用された。また発音のし易さに重点が置かれる。まず間違いようのない意味を持つ短縮語が要求され、迫力ある語になった。

C語彙群 科学、技術用語で専門分野別に用語表が作られ、自分の担当分野以外の事項に精通する必要はないとされた。科学的な精神とか、思考し探究を表現する用語は皆無で、科学という用語すらなくて、イングソックの一語に包括されてしまっている。

実際の文例をあげていえば、オールドスピークの Those whose ideas were formed before the Revolution cannot have a full emotional understanding of the principles of English Socialism(革命前に思想を形成された者はイギリス社会主義の諸原則について十分な感情的理解を持つことは出来ない。)というものは、ニュースピークで、ただ

オールドソシヤリスツ アンチソシヤリスツ
の三語 Oldthinkers unballyfeel Ingsock が十分表現される。ザ・タイ

ム紙が社説でこの三単語を使ったとき、一応はオールドスピークの内容を受けとるばかりでなくイングソックの真髓の理解に根ざした深い解釈が要求される。また一九八四年の時点で党の指令や業務には「実際には新語法といえないにしても、大半は新語法から成る」簡略用語が用いられた。記録局に勤めるウインストン・スミスへの通信文の一例は左のようである。

タイムス 83・12・3 bb 日命 報道 極 ダフルアスアングッド 不可 言及
アンバーンズ
非実在者 全面的リライト ファイル前 要上提
旧語法に書き直すと

一九八三年十二月三日付けザ・タイムス紙に掲載された「偉大な兄弟」の日々命令の報道は極めて不充分、既に実在しない人物に言及している。全面的に書き直して綴じ込む前に草案を上司に提出せよとなる。勲章をもらった美談の記事であるが、その人物はもう生存していない。すべて抹消せよの指示で、ウインストン・スミスは架空の人物を創造して旧記事の空白を埋める。

以上ニュースピークの実例をあげたのだが、新語法の概要をまとめると次のようになるうか。

語彙は党員がまさに表現したいと思うどのような意味に対しても的確な、或はしばしば極めて微妙な表現を与えるよう組立てられ、それ以外のどんな意味も排除される。

一、語彙については、①新用語の創製

②好ましくない単語を除去、死語とする

③留用語にあっては非正統、又は二次的意味を剥奪

④思考を縮少するのが目的であるから、語彙の削減が根本である

によって達成する。

二、文法面では顕著な特徴がある。

1 品詞間の転用が自由自在、名詞がそのまま動詞である

2 同一規則を適用して整頓、統一された語形

三、発音の単純化

留用された語彙の例にとると、

「この犬はシラミから自由である」

「この畑は雑草から自由である」

等の使用が許され、「政治的に自由」「知的に自由」の使用が許されなかった。その結果これらの概念は存在しなくなり、そのような用法は不用となった。留用された語として好ましくない意味はこのように追放して用いられた。名譽、正義、道德、國際主義、民主主義、科学、宗教らの用語は姿を消し、自由や平等という概念を中心にして

た用語群は犯罪思想に包括された。客観主義や合理主義という概念に基ついた用語は旧思想に一括されて、個々の用語は抹消されたのである。

文法上に関連して品詞間の転用が自由という中国文での漢語の働きに似たものといつてよいだろう。付録にあげられた例に Goodthink がある。名詞なら「正統性」を意味し、動詞に使えば「正統的な態度で考える」ということ。この語は他に次のように変化する。過去形及び過去分詞 goodthinked, 現在形 goodthinking, 形容詞 goodthinkful, 副詞 goodthinkwise, 名詞と動詞 goodthink, goodthinker である。名詞と動詞は同一の語根から出ていれは何らの異同はなかった。考える think があれば名詞にも用いられて thought (思想) は不用になる。名詞の knife は動詞に使うから Cut (切る) は不用になる。

次に文法的な法則をあてはめることで語型が整理され簡略になる例を表にしてあげる。

(表)

1.	総ての複数形は -s, es の語尾にする。(カッコ内は不用)
	man - mans (men) ox - oxes (oxen) life - lifes (lives)
2.	形容詞の比較級, 最上級は -er, est で統一する。
	good - gooder - goodest (better, best, more, most も廃止できるわけである。)
3.	動詞の過去, 過去分詞は一樣に -ed を付ける。
	steal - stole (stole 不用)
	think - thought (thought 不用)
	gave, brought, spoke, taken, …… も同じケースになる。
4.	接頭語, 接尾語の活用
	un - (否定) ungood (bad は不用)
	uncold (warm は不用)
	plus - (強意) pluscold
	plusgood (excellent = 優秀な)
	double - doublepluscold
	doubleplusgood (splendid = 見事な)
	副詞にする, -wise, 形容詞にする, -full,
	goodwise (well 廃止)
	speedwise (quick 廃止)
	speedfull

結びとして

前章で一九八四年のオセアニアの言語事情・ニュースピークを概観したのであるが、オーウェルは言語学的には素人ではなかったかという思いが浮かんでくる。意欲的に力をこめて創作したB語彙群にしても標準英語に基づいての考案であり、常識的ともいえる。これは一般読者に異和感を与えない、説得力を持つものとなった。その他も事務伝達の効率化のための国語簡略化の域を出ないといえる。

かつて世界は一つのコミュニケーションを理想に考えられたエスペラントの国際語運動がある。一方征服国の言語を抹消する政策や世界制覇の手段として政治的にことばを利用しようとしたナチスや大日本帝国の言語政策もあったが、理論的に検討され尽くした精緻なものとは言い難かった。その点オーウェルの未来の管理体制制国のニュースピークは独裁者が考えに考え、最終的な完成度の高い言語をめざしたはずである。人間を支配するためのことばの変革の問題提起と理論化は重要である。

オーウェルは美しく純正な国語の擁護に積極的であった。「一九八四年」を執筆はヘアーマイヤーズ病院でなされ、二冊のノートが残されたが、その中に「英語で不必要に用いられている外国語の語句」につ

いて尨大なりストを残している。「英語がだんだん悪くなる」「英語にふたたび活力をあたえよう」と叫んだ。そして具体的には「表現を簡潔に、新鮮なものに、むだのないものに」と強調した。

またここで注目しておきたいのは、オーウェルが、英語の墮落の要因のひとつは「政治にある」と考えていたことだ。一九四六年のエッセイ「政治と英語」で「政治演説や政治関係文書というものは、大部分、弁護などできないようなものを弁護するためのものである」と指摘する。さらに政治というものは左右を問わず、ますます不誠実なものになっていくとして「明確な言語表現を妨害する最大の敵は不誠実さだ」と極めつけている。ここにもオーウェルの人物と言語観をみることができる。

初めにも述べたが私は英文学にも英語学についても論評する資格のない者である。いま思いを致しているのは明治以来のわが国の国語国字問題の歩みである。表意文字の漢字を学習するのは負担が大きいとして、国字をカナモジにまたはローマ字に改めよう論、字音の、また歴史、現代仮名遣い、当用・常用と漢字の制限、いろいろの点で発議され、すっかりした解決のつかないまま今日に至っている。善意に基づくとも単なる便宜追求の観点からであろうと、軽々しく言語をいじるべきではない。ましてや内閣訓令など上からの修正は注意を要する。浅薄な合理主義に奔りがちで、ことばの尊厳さを冒瀆することに

なる。

人はことばによって思考し思想を形づくる。感動を相互に伝えあうのもことばである。詩歌はことばの靈妙な力によって生命をうる。ことばは民族の心情を基本に発展してきた歴史的・伝統的に磨かれた遺産である。単なる伝達の道具とみるべきでなく、怖れ慎しんで接すべき存在である。そうしたことばへの尊厳に対する気持ちが薄れつつあるとすれば心配である。権力者は常に人民を愚かなもの思考を必要としない者におきたがるという。ことばを完全に支配者、権力者のものでして、人民を完全に操縦しコントロールする悪魔の意図を暴こうとしたのが、オーウェルの「一九八四年」だとすると、襟を正して読むべき書だといえる。

このたび私には頸椎症性脊髄症という症状が出た。思わぬことであって、参考文献や引用資料の整理に不備を余儀なくされたのは残念である。ここでオーウェルの作品にヒントを得たと思われる、かんべむさしの作品「言語破壊官」（一九七九年『SFマガジン』八月号、八〇・六朝日新聞社刊同名書所載）について一言付加える。

物思いにふけて交叉点に立ち、起こった事故に気付かず通りすぎようとして男が検束される。思考警察によって危険性思考者とみなされ、容疑者は「危険性思考者世界強制捜索法」「同予備検束法」を適用

されたわけだ。取調官は言語破壊官も兼ねていて、「たもさっているな。からめかぬよう、すまつける」などと調べられ、秘密で行われたことが世間に暴露しないように、言語を破壊するピストルを脳にあてられる。そこで「他人と意味を共有している言語を」失ってしまう。解放された彼は外見は狂人そのものであった。

主観を持ち創造性ある抽象思考は言語によって進められる。それに目覚めはじめた人間を危険性思考者とするのは、オーウェルのイングソック体制とかんべの「反ハナモゲラ語社会」とも共通だ。個人の自由の否定であるが、それはことばを軸として世界が成り立っているのである。オーウェルは社会全体に通用する言語体系の改変、破壊による人民支配を想定し、かんべはリーダーになるかも知れぬ人材の言語中枢を破壊して排除をたくらむ姿なき支配階級を浮びあがらせる。

変わる、変える、国語のことば遣いの多様化の激しい変化の中で誰も早急な結論は出したいだろう。昭和五十九年九十四才で文化功労者に選ばれた歌人土屋文明に敗戦に打ちひしがれ、何の光明も持てなかつた頃、

垣山にたなびく冬の霞あり我にことばあり何か嘆かむ
と歌っているのを思いかえしているこの頃である。

高松短期大学研究紀要

第 15 号

昭和60年3月15日 印刷

昭和59年3月25日 発行

編集発行 高松短期大学

〒761-01 高松市春日町960
TEL (0878)41-3255

印刷 高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地